

実習1 実習1 生活の質を上げる工夫を学ぶ（疑似体験歩行訓練含む）

元大島眼科病院 山田 敏夫

近年、眼科医療に求められる業務も拡大し、その中でロービジョン児・者へのロービジョンケアを専門に行っている眼科も増加してきている。これからの視能訓練士は、視機能の評価・訓練のみならず、ロービジョンに対する教育や日常生活など、社会との関連性についても十分な知識が必要となってきている。このようなことから実習1の目的として、次の2点を挙げた。

- ① ロービジョンの疑似体験を通して、ロービジョン児・者の読みや書き、食事、買い物、歩行の手段など、学習方法や日常生活の動作を想定した不自由さ、不便さを学ぶ。
- ② ロービジョンケアを行うために視能訓練士として、どのようにしたらロービジョン児・者の生活の質を上げられるか、その工夫を考える。

実習を始めるに当たり、眼を閉じて起床時から就寝までの日常の行動を考えた。そしてロービジョンの視機能での想定される不自由さ、不便さを考えた。次に、アイマスクや疑似体験用シミュレーション眼鏡（低視力・中心暗点・周辺視野など）を装用して会場内を歩行し、階段の昇降も体験した。さらに2名が1グループになり、視覚補助具を使用して書字、読字、点字などの触覚、簡単な軽作業などを体験した。

日常生活の工夫では、食事などの時（ランチョンマットの選択、箸・さじ・フォークの選択、食事素材の視認性確認）などを体験し、その工夫を考えた。

買い物などでは、硬貨（1円、5円、10円、100円、500円）や紙幣（1,000円、5,000円、10,000円）などの弁別ができる方法を体験した。また手作りの硬貨選別の為のケースを配布して、作成する方法も学んだ。

さらに、手作りのDOGEN表を使用し、色コントラストやピンホール効果、屈折異常がある場合のボケ方やそれに伴う複視の体験をして、生活の質を上げるための工夫をどうしたらよいかを考えた。

視覚障害者の弁論大会のビデオを鑑賞して、ロービジョンケアを行うことの意義、専門職である前の一人の人間としての真の優しさが今求められていることを考えさせた。

最後に、受講者から実習1のまとめとして感想を述べてもらって終了した。